

Deuteronomy 23:5-25, 24:1-22, 25:1-6

(申命記23:5-6)「しかし、あなたの神、【主】はバラムに耳を貸そうとはせず、かえってあなたの神、【主】は、あなたのために、のろいを祝福に変えられた。あなたの神、【主】は、あなたを愛しておられるからである。あなたは一生、彼らのために決して平安も、しあわせも求めてはならない。」

これは、無慈悲なように聞こえますが、にせの宗教と関係を持つことに対する警告です。にせの宗教は悪魔的な起源から出ています。悪魔は主の集会に入ってはならないのです。この世を駄目にしたのは、ほかならぬにせの宗教なのです。高い塔とすてきなオルガンのある美しい教会の建物が、まさにサタンの巢窟であることもあり得るのです。私たちはにせの宗教に気をつけなければなりません。にせの宗教は、主の集会のどこにも居場所はないのです。

(申命記23:7)「エドム人を忌みきらってはならない。あなたの親類だからである。エジプト人を忌みきらってはならない。あなたはその国で、在留異国人であったからである。」

創世記の中で、エドムがエサウであり、エサウとヤコブは双子の兄弟だったことを見ましたね。アモンとモアブは拒否されなければなりません。なぜエドムはそうではないのでしょうか？なぜなら、エドムは彼らの兄弟だったからです。

信者にとっては、エサウは古い性質、すなわち肉を表します。私たちは肉を憎み、踏み付け、罰し、切断することもできますが、そんなことをしても何の役にも立ちません。私たちは肉を憎悪するべきでもありませんし、また、肉に取って代わられるべきでもありません。古い性質が私たちをコントロールしてはなりません。肉は神さまに反抗していますが、同時に私たちの一部であり、肉を憎んだからといって、何にもなりません。

彼らはエジプト人を憎んではなりません。なぜでしょう？「あなたはその国で、在留異国人であったからである。」

聖書の中で、エジプトはこの世を象徴します。次のように書かれています。

(ヨハネ2:15)「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」

もう一度言うておきますが、これは、自然の美しさや、私たちの家や車や、そのほか私たちの周りのこの世の便利さをありがたく思っはいけないという意味ではありません。私たちはこれらのものを恋慕っはいけない、ということがポイントなのです。もちろん私たちはこれらのものをさげすむべきではありませんが、恋慕うべきでもありません。アナタも私も、この世では寄留者であり旅人なのです。ちょうどイスラエルの子らが一度も荒野に花を植えるように召されなかったのと同じように、私たちもこの世を正しくしようとする運動に加わるように召されてはいません。私たちは神さまのみことばを伝えるべきです。それが私たちの務めです。でも、私たちは旅人であり寄留者であって、ただこの世を通り過ぎているだけなのです。

きよさ

さて、9節からきよさについての部分が始まります。戦場に出ているときでさえも、彼らは陣営をきよく保たなければなりません。

(申命記23:12-13)「また、陣営の外に一つの場所を設け、そこへ出て行って用をたすようにしなければなりません。武器とともに小さなくわを持ち、外でかがむときは、それで穴を掘り、用をたしてから、排泄物をおおわなければならない。」

神さまは衛生に関心を持っておられます。キリスト教が広まったところはどこでも、衛生状態が進歩してきました。

今日、あまりにも汚染について耳にします。この宇宙を汚染したのはだれでしょう？もちろん、神さまではありません。神さまは私たちに、きれいな小川と、きれいな空気と、きれいな水をくださいました。この地球を汚染したのは、罪であり、罪深い人間なのです。もしも人間が神さまのくださった規則に従っていたのなら、この地球は衛生的なところだったことでしょう。

(申命記23:14)「あなたの神、【主】が、あなたを救い出し、敵をあなたに渡すために、あなたの陣営の中を歩まれるからである。あなたの陣営はきよい。主が、あなたの中で、醜いものを見て、あなたから離れ去ることのないようにしなければならない。」

神さまはきよさに関心を持っておられます。清潔は敬神に次ぐ美德だ、と言ったのはウェブスターだったと思います。私は、きよさはそれよりもっと敬神に近いのではないかと思います。私なら、きよさは敬神の一部であると分類しますね。神さまは私たちのからだも、環境も、考え方も、行動もきよいことを望まれます。私たちは今日のこの世で、聖なる人々でなければなりません。ね、申命記はとても実的な書物でしょう？

(申命記23:17-18)「イスラエルの女子は神殿娼婦になってはならない。イスラエルの男子は神殿男娼になってはならない。どんな誓願のためでも、遊女のもうけや犬のかせぎをあなたの神、【主】の家に持って行ってはならない。これはどちらも、あなたの神、【主】の忌みきらわれるものである。」

神さまは、ご自分の民の中に娼婦や男色をする者があってはならないと言われました。神さまは、どんな状況の下であっても、違法や不道徳や不正の収入は受け入れないと言われます。

さて、私はこれを言ったら嫌われると分かっていることをこれから言います。私はどんなキリスト教団体も、違法を行っていたり不道徳な産業からのお金を受け取るべきではないと信じています。ある大きな醸造所からの献金を拒否したふたつの学校のゆえに、私は神さまに感謝します。ご存知のように、多くの怪しげなビジネスが、慈善事業に寄付することで尊敬を受けようとしています。

(申命記23:19-20)「金銭の利息であれ、食物の利息であれ、すべて利息をつけて貸すことのできるものの利息を、あなたの同胞から取ってはならない。外国人から利息を取ってもよいが、あなたの同胞からは利息を取ってはならない。それは、あなたが、入って行って、所有しようとしている地で、あなたの神、【主】が、あなたの手のわざのすべてを祝福されるためである。」

ここでもまた、神さまは彼らが自分たちの兄弟の世話をするようにと主張されます。そしてもしも彼らがお金を貸すのなら、兄弟から高利、つまり利息を取ってはならないのです。

(申命記23:21-22)「あなたの神、【主】に誓願をするとき、それを遅れずに果たさなければならない。あなたの神、【主】は、必ずあなたにそれを求め、あなたの罪とされるからである。もし誓願をやめるなら、罪にはならない。」

主への誓願は、自ら進んでするものでした。だれも、請願をすることを要求されてはいませんでした。それでも、一度人が主に請願を立てたなら、以前に示したように、その請願は絶対的な拘束力がありました。

(申命記23:24-25)「隣人のぶどう畑に入ったとき、あなたは思う存分、満ち足りるまでぶどうを食べてもよいが、あなたのかごに入れてはならない。隣人の麦畑の中に入ったとき、あなたは穂を手で摘んでもよい。しかし、隣人の麦畑でかまを使ってはならない。」

主の弟子たちがまさにこのことをしたことが新約聖書に書かれています。彼らはお腹がすいていたので、畑を通りながら穂を摘んで食べ始めました。申命記のここに書かれているように、これは違法ではありませんでした。神さまは、農夫はこのような好意の手を差し伸べるべきだと言われました。

24章

テーマ:離婚

この章は、離婚に関するモーセの律法から始まります。章の残りの部分は、あわれみが示されるべき、人と人との関わりにささげられています。皆さん。神さまはあわれみ深いお方です。そして、主の民はお互いにあわれみを示すべきであることを期待しておられます。

離婚に関するモーセの律法

(申命記24:1-4)「人が妻をめとり夫となり、妻に何か恥すべき事を発見したため、気に入らなくなり、離婚状を書いてその女の手渡し、彼女を家から去らせ、彼女が家を出、行って、ほかの人の妻となり、次の夫が彼女をきらい、離婚状を書いてその女の手渡し、彼女を家から去らせた場合、あるいはまた、彼女を妻としてめとったあとの夫が死んだ場合、彼女を出した最初の夫は、その女を再び自分の妻としてめとることはできない。彼女は汚されているからである。これは、【主】の前に忌みきらうべきことである。あなたの神、【主】が相続地としてあなたに与えようとしておられる地に、罪をもたらしはならない。」

さて、どうして再婚がこのような基準の上に置かれていたか、不思議に思われるかも知れません。なぜなら、奥さんをとっかえひっかえすることに神さまは同意されないからです。そんなことがあってはなりません。

これはずいぶん簡単な離婚の仕方だとは思いませんか？確かにとても簡単でした。なぜ神さまは簡単な離婚を許可されたのでしょうか？主イエスはその質問を受けられました。

(マタイ19:7-9)「彼らはイエスに言った。『では、モーセはなぜ、離婚状を渡して妻を離別せよ、と命じたのですか。』イエスは彼らに言われた。『モーセは、あなたがたの心がたくななので、その妻を離別することをあなたがたに許したのです。しかし、初めからそうだったではありません。まことに、あなたがたに告げます。だれでも、不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者は姦淫を犯すのです。』」

結婚の誓いに対する不誠実だけが離婚の理由でした。(コリント人への手紙7章は、離婚のもうひとつの理由、あるいは根拠を開くのではないかと憶測があります。)

イエスさまは、モーセがこの定めを作ることを許されたのは、彼らの心がたくなかったからだと言われました。神さまが許されるみこころ(His permissive will)のうちで、神さまが許可されることがとても多くあります。神さまは私たちの心のかたくなさのゆえに離婚を許可されます。今も離婚の多くのケースにおいて、それは真実です。同時に私たちの家庭の多く、そして多くの人たちの個人的な生活の中でも本当です。神さまはあわれみ深く、恵み深くあられるので、ご自分の直接のみこころのうちでないことを私たちの人生のうちにも許されます。神さまが許されるみこころが神さまのみ恵みを表します。これを踏まえ、より霊的な兄弟たちの中のある人たちは、ほかの人たちに関してあまり批判的にならないようにすべきです。

(申命記24:5)「人が新妻をめとったときは、その者をいくさに出してはならない。これに何の義務をも負わせてはならない。彼は一年の間、自分の家のために自由の身になって、めとった妻を喜ばせなければならない。」

神さまは戦いのときですらも、家庭を守られます。神さまは結婚の誓いの神聖さを尊重されるのです。

様々な規制

(申命記24:7)「あなたの同族イスラエル人のうちのひとりりをさらって行き、これを奴隷として扱い、あるいは売りとばす者が見つかったなら、その人さらいは死ななければならない。あなたがたのうちからこの悪を除き去りなさい。」

神さまは奴隷制度をとがめられます。そこに疑問の余地はありません。

(申命記24:20-22)「あなたがオリーブの実を打ち落とすときは、後になってまた枝を打ってはならない。それは、在留異国人や、みなしご、やもめのものとしなければならない。ぶどう畑のぶどうを収穫するときは、後になってまたそれを摘み取ってはならない。それは、在留異国人や、みなしご、やもめのものとしなければならない。あなたは、自分がエジプトの地で奴隷であったことを思い出しなさい。だから、私はあなたにこのことをせよと命じる。」

神さまはこのような無力な者、より運のない者たちを保護されます。神さまはよい貧民救済政策を持っておられ、興味深いことに、それが効果的だったのです。このことは少しあとで、ルツ記に入ったときに見ます。

テーマ：有罪の者の刑罰。やもめを守る定め。アマレクのさばき。

この章には、罪あるものを罰し、兄弟の名前をイスラエルに永続させることによって無実の者を守るための神さまのご配慮が示されています。この章は「アマレクの記憶を天の下から消し去らなければならない」という命令で締めくくられます。

40のむち

個人と個人との間の困難から起こってくるある種の犯罪がありました。私たちの専門用語では、軽犯罪と呼ぶものだと思います。これらは死罪に値するような深刻な犯罪ではありません。でも、それらも刑罰を必要としました。

(申命記25:1-3)「人と人との間で争いがあり、彼らが裁判に出頭し、正しいほうを正しいとし、悪いほうを悪いとする判決が下されるとき、もし、その悪い者が、むち打ちにすべき者なら、さばきつかさは彼を伏させ、自分の前で、その罪に応じて数を数え、むち打ちにしなければならない。四十までは彼をむち打ってよいが、それ以上はいけない。それ以上多くむち打たれて、あなたの兄弟が、あなたの目の前で卑しめられないためである。」

40のむちが限度でした。そうでないと、その人が死ぬ可能性がありました。1から40まで、何回むち打つかは、犯罪の重大さにかかっています。

このようなやりかたの刑罰は、すっかり時代遅れになってしまいました。幾人かの顕著な弁護士たちがこのことを話し合っているのを聞きましたが、それは興味深いものでした。もし、むち打ちの刑が公開されたら、(今私たちが経験している)無法のかなりの部分が解消するだろうということで彼らは同意していました。つまり、誰かが軽犯罪を犯したら、エアコンの効いた拘置所にその人を何日かとどめておくよりも、公の場に引き出して、その人をむち打ちにするのです。見たところ、神さまはそのように犯罪が取り扱われるべきだと考えられました。これが効果的だったかどうかの答えは、イスラエルの犯罪率はとても低いという事実が物語っています。

くつこを掛けてはならない牛

(申命記25:4)「脱穀をしている牛にくつこを掛けてはならない。」

ここにすてきなことが書かれています、神さまは牛を保護しておられます。イスラエルに行ったとき、私はまさにこのことの写真を撮りました。なぜなら、彼らは今でもそのようにしているからです。長いこと私はひとりのアラブ人が何度も何度も牛を回らせて、穀類を脱穀しているのを見ていました。そして彼は牛にくつこを掛けていました。神さまは言われました。

「そのようにしてはならない。牛はあなたのために働いている。あなたの穀類を脱穀しているのだ。食べさせてやりなさい。」神さまのご配慮はとてすばらしいものです。

パウロが申命記からのこの節を、コリントのクリスチャンにあてた彼の手紙の中で使っているのは面白いことです。

(Iコリント9:9-11)「モーセの律法には、『穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけない』と書いてあります。いったい神は、牛のことを気にかけておられるのでしょうか。それとも、もっぱら私たちのために、こう言っておられるのでしょうか。むろん、私たちのためにこう書いてあるのです。なぜなら、耕す者が望みを持って耕し、脱穀する者が分配を受ける望みを持って仕事をするのは当然だからです。もし私たちが、あなたがたに御霊のものを蒔いたのであれば、あなたがたから物質的なものを刈り取ることは行き過ぎでしょうか。」

パウロがこれをどのように適用しているか、分かりますか？彼は言っています。「あなたの説教者に給料を払いなさい。」

(Iコリント9:14)「同じように、主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活のささえを得るように定められています。」

アナタに靈的なものをもって奉仕している人は、アナタを靈的な食物をもって養っているのです。そのお返しに、アナタは彼を物質的なものをもって養うべきです。パウロはこの節をそのように適用しています。

私が座ってマイクに向かって話し、ラジオ放送のためにテープに録音している間、テープがぐるぐる回って、私は牛が穀物を脱穀しているように感じます。そしてそれこそ私がしようとしていることです。脱穀です。神さまは脱穀している牛にくつこを掛けてはならないと言っておられます。アナタ自身の適用をしてみてください！

やもめを守る定め。

さて、もうひとつのポイントに移ります。アナタが、神さまにはユーモアのセンスがない、と私に信じ込ませようとしても無駄です。神さまはここに、やもめを世話するための定めを書いておられます。あとからルツ記で見るように、この定めは効果的でした。でも、私にはこれはとてもユーモラスに見えます。

(申命記25:5-6)「兄弟がいっしょに住んでいて、そのうちのひとりが死に、彼に子がない場合、死んだ者の妻は、家族以外のよそ者にとついでにはならない。その夫の兄弟がその女のところに、入り、これをめとって妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない。そして彼女が産む初めの男の子に、死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルから消し去られないようにしなければならない。」

神さまは女性を保護しておられます。女性の権利について、多くのことを耳にします。そして、神さまが彼女たちの権利を守っておられるのは興味深いことです。イスラエルではほとんどの人たちが農夫だったことを私たちは思い出す必要があります。土地は人々の間で分割され、ひとりひとりが自分の土地を持っていました。人が死んだとき、彼は麦や穀物やまた、羊や牛といった家畜を残す可能性がありました。やもめは、この世話しなければならない農地とともに残されました。だれか、外部の男性、外国人かまたはほかの部族の男性が彼女と結婚したいと望み、そのためにこの土地を所有することになったとしましょう。それは禁じられていました。彼女は外部者と結婚することは許されていませんでした。ここに、やもめがプロポーズをするケースが書かれています。彼女がすべきことは、彼女の兄弟のひとりか、いどこか、またはできるだけ近い親戚のところに行って、自分と結婚してくれるように申し込むことでした。